紡績工場新入者の精神適応に関する研究, 特に沖縄出身者について

松井清夫*, 坂本 弘*, 石須哲也*

STUDIES ON THE PSYCHOLOGICAL ADJUSTMENT OF FEMALE NEW-COMERS IN A SPINNING INDUSTRY TO THEIR ENVIRONMENTS, PARTICULARLY ON THE WORKERS FROM RYUKYU

Kiyoo MATSUI†, Hiroshi SAKAMOTO† and Tetsuya ISHISU†

The majority of the female workers in the spinning industries in Japan live in their boarding-houses. Therefore, the new-comers have need of adjustment to both the labour and the new mode of living. In this report, the psychological adjustment to the new mode of living in their boarding-house was investigated.

As new-comers come from all the provinces in Japan, their wordings (dialects) are diverse. This was troublesome for them. Other perplexities for them were: how to spend money well, living with many boarders in a room, etc. The majority of them had adjusted themselves to these within three months.

But, workers from Ryukyu had different appearances. They had been afflicted with association with workers from other provinces.

After the Second World War, Ryukyu was separated from the mainland of Japan and was shifted under the rule of U. S. A. The state of affairs in the mainland was taught in the school of Ryukyu, but, in the mainland, the state of affairs in Ryukyu was faded away in the school education. Therefore,

日本の工業化にともなう労働力の需要が増大する一方人口構造の歪から若年労働人口の減少があり、労働力需要供給の不均衡が深刻な問題となりつつある。それに対し、能力開発を目的とした接近がなされる一方、新たな労働力給源を求める動きもみられる。すなわち、停年制が検討され、また沖縄地方に労働力給源を積極的に求

めるようになった。the workers from Ryukyu have extensive knowledge concerning the mainland. They have passion and nostalgia to the mainland. On the other hand, the workers from the mainland have little knowledge of Ryukyu, and they have not recognized the workers from Ryukyu as compatriots.

The workers from Ryukyu were distressed by these dislocation in their consciousness. Therefore, the workers from Ryukyu took aggressive group action occasionally, and then several cases of neurosis or psychosomatic diseases were observed among them.

An industrial effort on the mental health of the new-comers were made, i. e. the head of roommates was educated as an opinion-leader in their daily life. Then, though the adjustment to their daily superficial life has been made smooth, the above mentioned dislocation in their consciousness between the workers from the mainland and those from Ryukyu could not be solved.

In these problems of adjustment of the new-comers the industrial mental health may be closely related to the school education.

めようになった。

戦後、沖縄県は米国統治下におかれ、また1952年対日平和条約発効にともない同条約第3条によって正式に政治経済文化教育などの面で本土と隔離された。その後、祖国復帰の運動は沖縄と本土の両側から叫ばれているが、未だその渡航には旅券と査証を必要とする。しかし、沖縄地方には過剰な人口を扶養する経済基盤はうすく、常備労働者数500名をこえる民間企業は数社にすぎない。われわれが沖縄地方学童保健の状況を調査した約10年前の時点においても、若年労働力の過剰が問題とされていた。

*三重県立大学医学部衛生学教室 (主任: 松井清夫教授)

昭和43年5月13日受付, 普通掲載

†From the Department of Hygiene, Mie Prefectural University School of Medicine.

Received for publication May 13, 1968.

た。ここ数年来の本土産業における前述の労働力不足の状況から、沖縄に労働力給源を求める動きがあらわれたのも必然のことといえよう。

戦後20年余の歳月にわたって政治経済文化教育の面で沖縄と本土とをへだてた空白は労働力需要供給の面からの必然としてあらわれたこの沖縄の労働力移入に対してどのような影響を及ぼしたであろうか。本問題には社会学経済学文化人類学などの社会科学的側面が大きい、移入労働力に対する医学的もしくは人間科学的側面も含まれている。しかも労働力移入が企業体内へなされているので、産業医学的見地からも問題となる。われわれは沖縄出身新入者の間に、この背景に起因すると思われる適応障害の存在することを経験している。

しかし、沖縄出身者にかぎらず、新入者は新たな職場、生活環境に適応するため高度な適応機能の必要性にせまれ、場合によっては適応障害をあらわす。これに関し、新入者の体重、フリツカー値、好酸球数、好中球食食能、CMI¹⁾などを指標に調査をおこない、つぎのごときことを明らかにして報告した²⁾。すなわち、入社後3カ月目に生体機能の最低水準となる時期があり、以後対照値に復帰する。また、配属された職場の人間関係的環境により生体機能低下の度合いが異なり、職制上の上下関係や職場規範に問題のある職場では機能低下が大きいことがみられた。また、森園ら³⁾は集団就職後適応障害をきたし離職し、心身症神経症の発生をみた症例について報告し、新入者の就職後の生活環境の変化が重要な意味を持つことを指摘している。

したがって、沖縄出身者にみられた適応障害の中には他県出身者にも共通な、新入者全般の適応過程の問題も含まれているので、まず新入者一般の示す像を述べ、ついで沖縄出身者の特徴についてふれることにする。

なお、本報告は3年間の調査によるものであり、新入者に対する受入れ態勢は各年度毎にその段階の調査結果にもとづき段階的に変化させてきたので、その面にもふれて検討を加えることとした。

研究 方 法

対象は全従業員約1,500名(男子250名、女子1,250名)の某紡績工場である。女子従業員中約1,100名は寄宿舎に居住している。宿舎居住者はほぼ全国的範囲の地方出身者である。年齢構成は20歳までの若年層が約90%であり、学歴は中卒者が92%を占める。昭和40年4月にはじめて30名の沖縄出身者が採用され、寄宿舎に居住するようになった。ついで昭和41年に90名、昭和42年に100

名が採用された。

寄宿舎は15~20畳の部屋に6~8名が居住する。そのうち1名が部屋長となっている。昭和41年までは新入者が1~2名づつ部屋に割当てられ入寮していた。しかし、昭和40年までとくに新入者に対して部屋長の演ずる役割についての教育はおこなわなかったが、昭和40年末には約3カ月にわたり部屋長教育をおこない、新入者を受け入れる準備をおこなったので、古参者と新入者は同居であるが昭和41年度の新入者は昭和40年度の者とは幾分異なった部屋長—新入者関係環境に入ったことになる。さらに、昭和42年度からは新入者だけで部屋員を構成し、部屋長のみが古参者で入寮させた。この場合、新入者の部屋の部屋長となる候補者は約3カ月前から部屋長の役割について教育をほどこした。部屋長に対する教育内容の主点は、新入者理解、接し方、新入者が当面する困難な事態と対処の仕方、チームワーク、共同生活、部屋会議の意義、部屋会合の持ち方などであった。教育方法は講義方式、集団討議方式、ケーススタディ、役割演技などをもちいた。しかし、沖縄出身者のみで一部屋を構成することをさけ、他県出身者と混住させた。

調査は毎年度入寮後7カ月目に質問紙法によりおこなった。質問内容は就職入寮にともなう精神心理的困難、緊張に関する事項とした。一方、該寄宿舎にはカウンセリングルームが開設されているので、そこを訪れたケースについても検討を加えた。

研 究 成 績

I 新入者全般の適応過程

「とまどったこと」の頻度を内容別年次別に示したの

Fig. 1. Matters and Rates of Perplexities in the Life of the New-comer.

が Fig.1 である。「言葉の使い方」および「お金の使い方」にとまどいを多く訴えている。昭和40年では「寮内手続」、「雑居」、「友達がいな」ことの順に訴えているが、「寮内手続」は昭和41年、42年では有意に減少している。また、「言葉」は昭和41年も最多訴事項ではあるが、昭和40年より有意に減少し、42年では「お金の使い方」が最多訴事項となっている。昭和40年に比し41年、42年に有意な減少を示した事項はその他に「街の様子」がある。

「最も慣れにくかった事項」を Fig.2 に示す。昭和40

Fig. 2. Rate of the Most Unaccustomed Matter.

年、41年においては「雑居」が最も慣れにくい事項であったが、昭和42年では有意に減少した。これに対し、「言葉」は昭和40年より42年になるにしたがい次第に増加の傾向をとる。

慣れるまでの期間がどれくらい要するかをみたのが Fig.3 である。昭和40年では2〜3カ月で慣れる者が最も多かったが、昭和41年、42年では1カ月以内の者が有

Fig. 3. Periods before the New-comers were Accustomed to the Matters.

意に増加し、2〜3カ月の者が減少した。したがって、ほとんどの者は3カ月以内に慣れてくるが、慣れまでの期間は短縮される傾向にある。また、おそくとも6カ月までに慣れてしまうものと思われるが、約5%の者は半年を経ても慣れないでいる。

困った時の援助者を誰に求めるかをみたのが Fig.4 で

Fig. 4. Supporters of the New-comers at the Time of Perplexities

ある。昭和40年、41年では同郷人、同室者が頻度が高く、42年では部屋長が高い。昭和41年度から部屋長の援助を求める者が有意に増加しており、昭和42年でいちじるしくなっている。

新入者がカウンセリングルームを利用する率を入寮後月別にみたものが Fig.5 である。図にみるごとく、入寮

Fig. 5. Monthly Rate of the Number of Clients Visiting the Counseling-room.

後5カ月目すなわち8月になると古参者とはほぼ同率の利用率となる。また10月、11月および2月には新入者利用

率が高くなる傾向があるが、統計的に有意ではない。

II 沖縄出身者の適応

最も慣れにくかったことの頻度を Fig.6 に示す。図にみるごとく、慣れにくかった事項は新入者全般にもみら

Fig. 6. Rate of the Most Unaccustomed Matter for the New-comers from Ryukyu.

れた「言葉」、「お金の使い方」、「雑居」である。しかし、沖縄出身者特有な事項として「他県人とのつきあい」があげられる。自由応答で求めた「他県人とのつきあい」の問題となる内容はつぎのごときのものであった。すなわち、「色が黒いからやっぱり土人だといわれる」、「食事の時に土人が箸を使うといって笑われる」、「うどんも食べるのかといわれる」、「土人の踊りをみせてくれといわれる」、「アメリカの領土だから英語をしやべるのかといわれる」、「家に屋根があるのか」、「沖縄はハワイと同じか」などで、本土出身者の沖縄についての無知識と歪んだ認識に基づく対応態度によるものである。

これらの事態にどれくらいで慣れをきたすかをみたの

Fig. 7. Periods Before the New-comers from Ryukyu had been Accustomed to the Matters.

が Fig.7 である。新入者全般にみるごとく、2~3 カ月までに慣れる者が多く、昭和40年に比し41年、42年は1 カ月以内に慣れる者が有意に多い。しかし、6 カ月以上経ても慣れない者が昭和40年21%、41年12%存在し新入者全般における頻度より有意に高い。しかし、42年度は6%となり、全般の頻度と同程度となった。

カウンセリングルームを訪れたケースのうち、沖縄出身者に特有とみられる内容を持つものをつぎに紹介する。

事例1：19才，高卒，沖縄出身

昭和40年4月高卒4名入社1人。同年6月沖縄出身高卒者4名、中卒者9名が労務課へ「沖縄出身者だけ同じ部屋にしてほしい」旨申し入れる。本人はそのリーダーである。申し入れの理由は前述のごとく、周囲の本土出身者が沖縄についての知識に乏しく、非常識な発言が多かったためであった。聴取面接時に本人は強い攻撃性を示した。「労務の人はなだめるだけで私達が周りの人の馬鹿にした言葉を気にせずにいればよいというが、それで労務の人はことがおこらないからよいかもわからないが、私達は一切どうなるのか。馬鹿にされっぱなしなのは私達なのですから……」と。「沖縄にいる時には、本土へ行けば何となく良いように言われてきた。しかし、ただあこがれだけできたのではない。本土のことは学校で可成りくわしく教えてもらってきたつもりだ。しかし、本土の人達がこんなに沖縄の人間を馬鹿にするとは思わなかった」とも述べている。

本問題は本ケース1人の問題ではないので、グループカウンセリングをおこなった。その結果、該工場への沖縄からの就職ははじめてであり周囲の人の理解の少ないこと、これからの後輩のために皆ができるだけ本土の人に良い印象を与えることが悲劇をのりこえる最大の途であること、そのためには沖縄出身者だけが同じ部屋にたまるより広く他県出身者と接する方がよくはないかなどの集団討議と決定が導き出された。ここに至るグループカウンセリングの機会は6回であった。この際指示的接近も交えておこなわれた。

事例2：16才，中卒，沖縄出身

前事例において述べたごとく、沖縄出身者が集団行動をとっている同時期に、その集団に属さなかった本ケースが顔面頬部の皮膚のただれを主訴として訪れた。皮膚のただれは「皆から土人だ」といわれ、色の黒いのを生まれてはじめて指摘され、皮膚のただれるまでこすったことが判明。「どうしても色を白くしてくれ」という。3回面接をおこなった後に、現在苦しんでいるのは自分

だけでないことを知らせ、事例1のケースに会わせる。事例1ケースにオピニオンとしての意識を持たせるとともに本事例を同郷者であり同じ立場の集団内に包擁するごとく努めた。

事例3：19才，高卒，沖縄出身

昭和41年2月入社。同年8月胸痛と睡眠障害をきたし、某医より肋間神経痛との診断の下に投薬をうける。症状悪化して2週間後には朝方4時頃まで寝つかなくなり、食慾不振もあらわれる。空腹感はあるも食事がとれないという。YGテストで内向性が著明、バウムテストで抑圧傾向がみられた。面接では抑圧と依存傾向がみられた。周囲の人から土人といわれ、がまんをしてきたがくやしくてしかたがないことが明らかとなる。催眠療法を数回数日間隔でおこない、自己洞察の結果睡眠障害と心理要因との関連を意識するようになり好転する。

症例4：18才，中卒，沖縄出身

昭和41年3月入社。同年10月頃より頭痛をきたし、某医より約3カ月間頭痛薬の投与をうける。頭痛頑固となり転医の相談のため面接に来所。精診の結果理学的所見なし。面接により、「洋服を着ている」とか「土人の踊りをみせてくれ」といわれたことによる情緒反応が強く潜在することを知る。本人との面接を重ねると同時に周囲の者の環境調整に努める。環境調整途上、周囲の者との面接で「自分達は沖縄を土人のいるところと本当に思っていた」、「そんなに悪いことを言ったとは思わなかった」などの意見に遭遇した。

考 察

森園ら³⁾は集団就職後3年間に約1/3が離職している事実を指摘し、帰省後神経症心身症の発症をみた6例をあげ、それら症例を治療する過程で強く感じたこととして、「就職決定の時期から心身医学的アプローチが十分に試みられていたならば予防し得たであろうことと離職者の中にこれら症例に類する場合は相当数存在するであろう。」ことを述べている。本報の対象工場女子寄宿舎従業員のほとんどが集団就職者であり、事実就職後早期離職が労務問題としても精神衛生問題としても重要課題となっている。離職者における神経症ないし心身症発生の要因として森園らはつぎの4点をあげている³⁾。すなわち、1)生活環境の急激な変化に適応できない場合、2)私生活における葛藤が要因となっている場合、3)知的能力が低いために職場に適応できない場合、4)集団就職が現実からの逃避手段として選ばれている場合である。これらは心身症神経症発症の要因となり得るものである

が、早期離職を就職者の不適応にもとづく結果としての社会的行動としてみた場合、上述の要因の他に就職者の持つ自己の労働に対する価値感や労働意欲が離職には大きな因子となる。われわれがおこなっている退職面接のケースでは早期離職者ほど労働価値感の欠除が大きい。しかし、離職という不適応反応を示していない大部分の就業者はすべて円滑な適応がなされているわけではない。研究成績の中で述べたごとく、生活環境の変化のうち言葉とお金の使い方や雑居に適応するための努力が払われ、最も適応しにくい問題として昭和40年、41年では雑居がある。お金の使い方に関連してカウンセリングルームを訪れたケースによれば、月給の全額を月給日から5日間に使いはたした者があり、また一方小遣いとして1,000円のみを手許におき残りを家に送金して困っている者もあり、お金の使い方の現実的表出は多彩である。これらは経済概念の形成が就職前になされておらず、主体的にお金の使い方を制御する生活体験に欠ける例が多い。

新入者が当面する日常生活上の精神負担は相談機構の整備をおこなったにせよそこに全面的な処理解決の場を求めることは不可能に近い。そこで、新入者の生活に最も密着し相談相手となり得る立場の者として部屋長に着目した。もっとも、部屋長の役割についてはすでに寄宿舎の精神衛生的環境の調整や精神障害者早期発見のためのkey-personとなり得ることを指摘していたので⁴⁾、これらの意味を包括して部屋長教育をおこなった。部屋長教育の主点としては部屋という単位に小集団としての機能⁵⁾をもたせ、その中で部屋長がオピニオンとなり得ることとした。具体的教育内容課題は研究方法の項に述べたごとくであった。この教育は、昭和41年度の新入者を迎えるために準備された。したがって、昭和40年度新入者の迎え入れられ方と昭和41年度のそれとでは部屋長の教育の点で異なる。

昭和40年度に比し昭和41年度においては、言葉、寮内手続、街の様子などのとまどいは減少している。しかし、慣れにくい事項としては雑居があげられ、昭和41年度においても減少はみえていない。紡績寄宿舎生活においては雑居はなかば宿命の事項であり、企業が余程の投資をおこなわないかぎり解決のつかない問題であろう。しかし、雑居は一面集団生活としての意味を持ち、寄宿舎の持つ教育的機能の面からすればかえって集団生活は教育上の好都合な場ともなり得よう。しかるに負の面としての雑居があげられており、好ましい集団形成への質的転換はなされていない。したがって、部屋長教育の結果

もたらされたものはこれらの項目にみるごとく、新入者の表層の困惑の軽減にのみとどまると解される。

昭和41年の部屋長教育の過程と上述の効果判定の結果から、部屋長教育のみの限界を感じさせられた。部屋長の平均年齢は20才であり、中卒女子の該年令の社会的能力から考えてこれ以上の効果を期待することは困難であった。部屋長会議に提出された彼女らの意見によれば、過去に入社して部屋員となっている人達の協力を得ることが困難であり、新入者中心の場の形成ができないことが明らかになった。したがって、昭和42年度においては、41年度同様部屋長教育をおこなうとともに、新入者は新入者のみの部屋とし、部屋長のみ古参者となる部屋員の構成に変更した。すなわち、昭和42年度は部屋長教育と新入者のみによる部屋構成の二つの対策がとられた。その結果、昭和41年度までの結果と異なってきたのはつぎの2点である。すなわち、雑居になれにくいとしていた者が有意に減少したことと、困った時の援助者として部屋長をあげる者が有意に増加したことである。これらは部屋長教育による部屋長のリーダーシップを発揮できる場として、新入者のみの部屋構成とした点にある。41年度までのごとく、他の部屋員の協力を得ることや組織化に労力を使う必要がなくなっている。したがって、新入者の表層の困惑に対する接近から一歩進んで、部屋の単位が集団としての機能を持つに至ってきたことを示すものである。このことから、中卒の20才前後の女子において、教育と実施のための好ましい場が与えられればオピニオンリーダーとしての機能を十分はたし得るものであることおよび、新入者の適応を高めるためには部屋長教育が重要であり、また、部屋長のリーダーシップの発揮できる場の形成にも意を注ぐ必要があることが明らかにされた。

以上のごとく、新入者が新しい生活環境へ適応する過程は新入者を受け入れる方法によってある程度変ってくる。本研究の対象工場新入者はほとんど全国的範囲からの出身者によって構成されており、上述のごとき一般的適応を示すのに対し、沖縄出身者は異なった問題を持っていることが明らかとなった。

沖縄が本土と分離されている20年の間に出生し、教育されてきた新入者の間で、相互理解の面でも本土出身者と沖縄出身者との分離した状態が認められる。現在、政治的に沖縄の復帰問題が論じられている一方、東京大学沖縄調査団により沖縄と本土との社会的心理的距離について沖縄住民を中心に調査がおこなわれた⁶⁾。調査結果の中で注目すべきは、本土への接触が多くなることが本

土に対する不信を増大させている事実である。本調査は主として沖縄の復帰という政治面からの調査であるため、不信の対象も政経面にむけられている。これに対し調査報告では「徳川時代以来の長い不幸な歴史を背景とし、明治になってからもいろいろの差別待遇をうけた。さらに、第二次大戦で唯一の戦場となり、多くの非戦闘員が犠牲にされた。その上、戦後はアメリカの施政下におかれ、悲劇の連続であった」歴史的背景を述べている。さらに、20才代の沖縄住民は復帰問題に対して即時全面復帰より段階的復帰論者の方が15%多い点をあげ、現実主義的な戦後の新しい教育の影響による点が多いとしている。以上のごとき沖縄住民の意識の実態のみをもって、本報の調査成績を考察し得るであろうか。

われわれが10年前に沖縄学童の保健事情調査のため現地におもむいた折に、どこの学校においても本土に関する内容の教育が濃厚におこなわれているのを見た。また、本報対象工場のカウンセリングルームを訪れたケースの言葉として、「私達は同じ日本人であるのに、本土の人は沖縄を特殊視して、日本人としてはみてくれない」と訴えている。本土出身者は沖縄は日本であるとは思っているが、その住民は日本人であり、その生活もわれわれと同じであるという意識や一体感は持っていない。このことは少なくとも本報対象工場の若年女子については明瞭に示されている。琉球大学の宮里は「本土国民に訴えたいことは、沖縄問題を自分自身の問題として考えてもらいたい」と述べている⁷⁾。これらを総合的にみると、沖縄出身者の多くが示す不適応は沖縄住民の悲劇的歴史により形成された被害者意識にのみ帰し得ない。沖縄出身者は本土に対し親近感を持ち、また親近感を持つに必要な本土に関する知識の導入がなされている。これに対し、本土出身者は沖縄県人に親近感がうすく、親近感を持つに必要な沖縄に関する知識が導入されていない。すなわち、相互理解のための情報基盤水準の差が不適応現象をおこしている要因のごとく考えられる。したがって、個々に表出されてくる不適応の現象形は異なるが、発生要因は個人的立場や構造よりもその背景としての社会的要因に比重が大きい。集団精神健康阻害の一つの問題といえよう。また、不適応そのものは沖縄出身者集団就職先の企業においてあらわれているが、これは単に個々の企業努力によって解決のつくものではない。その因は本土の学校教育の中に根ざした問題であるといえよう。

結 論

紡績女子若年新入者の寄宿舍生活適応について、3年間継続調査をおこない、つぎの結果を得た。

- 1) 適応しにくい事項は、言葉、お金の使い方、雑居である。
- 2) 多くの者はこれらの事項に対し3カ月以内に慣れる。しかし、6カ月以上経ても慣れない者が数%存在する。
- 3) カウンセリングルーム利用率は入社後5カ月目頃に古参者と同率となる。
- 4) 部屋長教育をおこなうと新入者の表層の困惑程度は支援できるようになる。
- 5) 部屋長教育にあわせて、部屋長にリーダーシツプをとらせ得る場を形成すると集団機能が高まり、雑居に対する抵抗が少なくなる。
- 6) 沖縄出身者と本土出身者との間の人間関係不調和がみられる。

- 7) これは本土出身者の沖縄に対する認識不足にもとづくことが多く、本土学校教育における欠陥によるものと思われる。

本研究に対し、文部省科学研究費の援助を受けた。感謝の意を表す。
なお、本論文の要旨は第41回日本産業医学会総会で発表した。

- 1) 松井清夫・他：コーネル医学指数の簡易改良とその応用，日本公衛誌，9(8)，337～340，1962.
- 2) 滝川 寛・他：新入社員の職場適応に関する研究，産業医学，6(3)，148，1964.
- 3) 森園隆一・他：集団就職における離職者の心身医学的考察，精神身体医学，6(6)，378～381，1966
- 4) 松井清夫・他：寄宿舍における部屋の精神衛生的環境について，産業医学，8(1)，7～10，1966.
- 5) 青井和夫：小集団，誠信書房，1960.
- 6) 尾高邦雄・他：沖縄のジレンマ，朝日ジャーナル，9(20)，10～18，1967，
- 7) 宮里政玄：核つき返還と復帰運動，朝日ジャーナル，9(20)，12～18，1967.